

2022 年度

＜文 学 部＞  
小 論 文 問 題

## 注 意 事 項

- 1 問題冊子は、監督者が「解答始め」の指示をするまで開かないこと。
- 2 問題冊子は全部で7ページ、解答用紙は全部で3枚、下書き用紙は2枚である。脱落のあった場合には申し出ること。
- 3 解答用紙の各ページ所定欄に、それぞれ受験番号（最後のページは、左右2箇所）、氏名を必ず記入すること。なお、解答用紙は上部で接着してあるので、はがさず解答すること。
- 4 解答は、すべて解答用紙の所定欄に記入すること。
- 5 解答は、「横書き」にすること。
- 6 解答の字数制限は、句読点や記号を含めて数えること。
- 7 解答以外のことを書いたときは、該当箇所の解答を無効とすることがある。
- 8 問題冊子の余白は下書きに使用してもよい。
- 9 問題冊子及び下書き用紙は持ち帰ること。

(余 白)

## 問題

次の文章を読み、あとの設問に答えよ。

### 構築主義

米国の文化人類学からは多くを学んだが、今日、「文化」、あるいは「文化」と「政策」の関係について考えるうえで根幹を成す視座の一つに「構築主義 (constructionism)」がある。ある文化的特質を所与のものとして捉えるのではなく、その生成にまつわる過程や力学を重視する立場のことで、「本質主義 (essentialism)」と対を成す概念とされる。つまり、ある文化的特質を固有不変の「本質」として捉えることを拒み、一旦括弧に入れ、その断片性や不完全性、文脈依存性を解き明かすということだ。

例えば、「はしがき」で言及した「日本人論」、すなわち「日本らしさ」をめぐる言説は本質主義の典型とされ、構築主義にとっては精査の対象となる。歴史を振り返れば、日清・日露戦争の富国強兵の時期には、新渡戸稲造の『武士道』や内村鑑三の『代表的日本人』など、西洋の先進国に対して日本を肯定的に捉える言説が流行した。敗戦から占領期にかけては、近代化論やマルクス主義が日本の知識人に影響をもたらしたが、相反する両者の理論的主張とは裏腹に、日本社会の認識という点では、どちらも「前近代的」「封建的」「非合理的」「反民主的」といった負のイメージを共有していた。ところが、高度成長期になると、欧米の先進国モデルや社会主義的な発展段階説とは異なる視点から日本を再考する言説が台頭し、加藤周一の「日本文化の雑種性」や梅棹忠夫の「文明の生態史観序説」といった評論が発表され、日本的システムの肯定的作用を説明する中根千枝の『タテ社会の人間関係』や土居健郎の『「甘え」の構造』がベストセラーとなった。逆に、1980年代に入り「国際化」への圧力が強まると、日本的システムの否定的作用を危惧する言説や、国際社会における責任の引き受け方をめぐる言説が目立つようになった。

いわば、「日本人論」とは、それぞれの時代状況において「自分探し」の役割を担ってきたジャンルであり、主に「米国」や「西洋」を合わせ鏡としながら、その都度、「日本らしさ」が構築されてきた。日本礼賛色の強い、近年の新たな「日本人論」ブームの背景には、米国や西洋の相対的衰退、中国や韓国への反発、人口減など日本の将来への不安、「反日」のレッテルを恐れる出版社側の自主規制、日本文化に対する海外か

らの高評価などが混在しているように見受けられる。

その日本文化については「外来文化を融合しながら独自の文化を発展させている」「自然との調和や共生を重んじている」「革新と伝統を融合している」「細部へのきめ細かな配慮に富んでいる」といった特徴づけをされることが多いが、構築主義はそうした特質を直ちに所与の本質と捉えることはしない。むしろ、例えば、①日本以外の社会にも認められる特質ではないか、②そうした特質とは正反対の事象も存在するのではないか、③地域差や階層差、男女差、世代差といった点を考慮すると「日本」という大きなカテゴリーで一括りにするのは乱暴ではないか、④価値基準そのものがエスノセントリック（自民族中心的）ではないか、⑤そもそも誰が、誰に対して、何の目的で、こうした言説を生産し、流布しているのか、といった点への留意を求める。

もちろん、こうした構築主義の立場には次のような反論があり得る。

まず、第一に、それでは「日本文化」を語ることは一切許されないのか、「日本文化」なるものは存在しないのか、というものだ。構築主義の立場を突き詰めてゆくと、自己であれ、他者であれ、いかなるものに対しても何も語れなくなる。いわゆる「相対主義のジレンマ」であり、そこには「すべては相対的である」という前提そのものは相対化され得ない——つまり、相対主義そのものは絶対的真理であるという——自己矛盾が内包されることになる。この点に関して、私自身はラディカルな相対主義の立場は取らない。比較の対象やそのレベル、あるいは目的によっては一定の文化的特質を抽出することは十分可能だと考える。しかし、私の知る限り、全てを包み込むような日本文化の本質的な特質はいまだ科学的——少なくとも文化人類学的——には見出されていない。むしろ、多くの場合、「日本らしさ」は「事実」というよりも「願望」に関わるものという印象を受けている。

第二に、とはいえ、それはかなり厳密に考えた場合であって、現実には人間はもっと柔軟に文化を捉えているのではないのか、という反論がある。この点はもっともで、人間は世界を恣意的に切り取り、分類（分節）し、意味づけて生きる動物であり、それはいわば、本質主義的な営為の連続とも言える。それを否定することは、自らの生すら否定することになりかねない。私自身、日常や社交の場において、文化論を厳密に展開しようとは思わないし、自ら本質主義的な文化論に興じることさえある。そうした言説によって織りなされているのが日常や社交だと思うからである。一種の「戦略的本質主義」——半ば確信犯的に、本質主義的な言説を用いること——と言っても良い。構築主義とは、あくまで学術的な意図と見地から、そうした営為を客体化し、解き明かす立場

に過ぎない。

## 境界線への眼差し<sup>まな</sup>

もともと自分の価値観や思考を切開し相対化する手段として文化人類学を選んだ私だが、かねてから「本当の自分」や「確固たるアイデンティティの確立」といった語りには違和感を抱いていた。「人文科学の究極目的は人間を構成することではなく人間を溶解することであると信ずる」と『野生の思考』（大橋保夫訳、みすず書房、1976年 [1962年]）で謳い上げたのはレヴィ=ストロースだが、人間の意識の深層で働く思考のコード（構造）の解析に尽力した彼が記した次の一節に、20代半ばだった私は深く共鳴したのを覚えている。

私は以前から現在にいたるまで、自分の個人的アイデンティティの実感をもったことがありません。私というものは、何か起きる場所のように私自身には思えますが、「私が」どうするとか「私を」こうするとかいうことはありません。私たちの各自が、ものごとの起こる交叉点<sup>ま</sup>のようなものです。交叉点とはまったく受身の性質のもので、何かそこに起こるだけです。ほかの場所では別のことが起こりますが、それも同じように有効です。選択はできません。まったく偶然の問題です（『神話と意味』大橋保夫訳、みすず書房、1996年 [1978年]）。

まさに構築主義的なアイデンティティ論の極みとでも言うべき表現だが、私自身の日常のふとした判断や感覚の偶有性を鑑みると、実に説得力のある言葉に思えた。

余談になるが、この点に関連して、米国人の社会学者があるセミナーで吐露したエピソードは興味深い。少年期にハバナ（キューバ）からマイアミ（米フロリダ州）に移住した彼は、ずっと「よそ者」感覚に苛<sup>さいな</sup>まれ、全米有数の大学で教鞭を執り始めてからも、自らを「キューバ人」と紹介し続け、「米国人」と称したことは皆無に等しかった。しかし、2001年の米同時多発テロの直後、その自分が“We Americans”と知らず知らずのうちに発していることに気が付き、驚愕<sup>がく</sup>したという。テロという外敵<sup>べん</sup>に晒<sup>さら</sup>されることで、無意識のうちに「米国人」というアイデンティティが生起したわけである。

何かしらの出来事を契機に自己認識が変容する——ないし再構築・再編集される——ことは決して珍しくない。例えば、海外経験を通して祖国愛に目覚める者もいれ

ば、逆に、祖国を疎んじるようになる者もいる。ナショナリストとインターナショナリスト、あるいはコスモポリタンを分岐する「交叉点」は想像以上に脆い<sup>もろ</sup>のかも知れない。

こう考えてゆくと、構築主義の根底には境界線への眼差しが強く横たわっていることが分かる。つまり、境界線に囲われた中身そのものよりも、まずはそこに境界線が引かれていることの意味を問う。中身の「善し<sup>あ</sup>悪し」や「好き嫌い」そのものよりも、線引きの背後にある意図や力学、基準をまず問うのである。

例えば、「文化とは何か」とは昔から繰り返される問いの一つである。今から60年以上前に文化人類学者のアルフレッド・クローバーやクライド・クラックフォーンが編んだ『文化』(Culture, Peabody Museum of American Archaeology and Ethnology, Harvard University Press, 1952、未邦訳)には、当時の有力な学者による161の「定義」と100の「見解」が紹介されている。ほとんど学者と同じ数だけ解釈があるということだ。なかでも最も有名なのは、19世紀後半の文化人類学者エドワード・タイラーが述べた「文化あるいは文明とは、知識・信仰・芸術・法律・習俗・その他、社会の一員としての人の得る能力と習慣とを含む複雑な全体である」という定義であろう(『原始文化』比屋根安定訳、誠信書房、1962年 [1871年])。「文化」を広く捉え「文明」と同列扱いしている点が特徴的だが、「広汎すぎて定義になっていない」「定義の前提として「芸術とは何か」「信仰と習俗の違いは何か」といった別の定義を必要としてしまう」など批判も多い。

② 構築主義の考え方に立つと、「文化とは何か」という問いは一種のトートロジー(同語反復)に近くなる。むしろ、まず問うべきは、いつ、どこで、誰が、何を以て、誰に対して、何のために、どのように「文化」を線引きし、用いているかということになる。

そして、文化が境界線をめぐるせめぎ合いならば、様々な境界線を引き、ときにそれを保守し、ときにそれを革新しながら、世界を分類(分節)し、意味づけ、生を織り成しているのが人間ということになる。

例えば、レヴィ=ストロースは、ブラジルとパラグアイの国境地域に暮らすカデュヴェオ族を訪れた際、女性たちの「化粧」について次のように記している。

顔の塗飾<sup>ま</sup>は先ず、個人に人間であることの尊厳を与える。それは、自然から文化への移行を、「愚かな」動物から文明化された人間への移行を果たすのである。次に、

カーストによって様式も構成も異なるこの塗飾は、複合的な社会における身分の序列を表現している。このようにして顔面塗飾は、或る社会的機能をもっているのである（『悲しき熱帯Ⅰ』川田順造訳、中央公論新社、2001年〔1955年〕）。

「化粧」が線引きする境界線をこのように示したうえで、レヴィ=ストロースは続ける。

素晴らしい文明ではないか、そのクィーンたちは化粧で夢を囲むのだ。化粧は決して到達できない黄金の時を叙述する神聖文字であり、法典がないので、クィーンたちは身を飾ってその時を祝福するのである。そして自らの裸体を現わすように、黄金の時のヴェールを外して見せるのだ（同上）。

先住民族社会と高度近代化社会では「化粧」の意味や重みも違うであろう。しかし、例えば、高度近代化社会の多くで化粧の低年齢化が進み、流行のメイクアップ・パターンが変わり、年代や世代によって趣向も異なり、近年では若い男性の間でも関心が高まっていることの「社会的機能」という点では、両者の間には一定の親和性もありそうだ。

ちなみに、カデュヴェオ族のような先住民族のなかには、「3」以上の数詞が無い、「左」「右」の語彙が無い、自分たち以外の者に対して「人間以外の者」ないし「人間以下の者」という呼称しか持たない部族も珍しくない（「アイヌ」も「イヌイト」も「人間」を意味する自己呼称である）。世界をそう線引きしているということだ。

### 境界線を編み直す

こうした境界線は、当事者にとっては一種の「暗黙知」であるが、それを可視化し、編み直すことで、<sup>③</sup>新たな「現実」を創出しようとする試みも数多く存在する。

その一つが「芸術」なのかも知れない。

（出典：渡辺靖『〈文化〉を捉え直す——カルチュラル・セキュリティの発想』岩波新書、2015年。ただし、引用にあたり一部表記を改めた。）

- 第1問** 下線部①の「構築主義 (constructionism)」とはどのような立場か、本質主義および相対主義と対比させながら、300字以内で説明せよ。(120点)
- 第2問** 下線部②の“構築主義の考え方に立つと、「文化とは何か」という問いは一種のトートロジー (同語反復) に近くなる”とはどういうことか。文中で紹介されたエドワード・タイラーの「文化」の定義に即して、200字以内で説明せよ。(80点)
- 第3問** このあと著者は、境界線を可視化し、編み直すことで“新たな「現実」を創出しようとする試み”(下線部③)の一例として芸術実践を挙げる。芸術実践に限らず、境界線を編み直すことによる“新たな「現実」を創出しようとする試み”の実例、あるいは、あなたが境界線を編み直すことによって“新たな「現実」を創出”してみたいと思うことを挙げ、その意義について、500字以内で論述せよ。(200点)